

序章 香港セメタリーに眠る日本人の物語

明治開国から大正期にかけて(1878~1918)

香港墳場 Hong Kong Cemetery は、イギリスの植民統治が始まった 1845 年頃、外国人墓地としてつくられた。ハッピーバレー競馬場の向かい側、アバディーン・トンネルにかかる丘の斜面に、約 7000 の墓石が並ぶ。日本人と家族の墓およそ 470 柱が点在し、その場所を総称して「香港日本人墓地」という。明治時代に亡くなった民間人が約 8 割を占める。第二次世界大戦での戦没者は埋葬されていない。

最も古い墓は、湯川温作という 22 歳の陸軍士官である。湯川はフランス留学中に病に倒れ、帰国の途上、香港で亡くなった。明治維新で開国した日本からは、将来を嘱望された若きエリートたちが、欧米各国へ派遣される。一方で、10~20 代の女性が多数、アジア各地の娼館で働いていた。海外へ出稼ぎに行く女性たちは、のちに「からゆきさん」と呼ばれるが、多くは島原や天草の貧しい家の娘たちが、家族のために身を売ったのだ。香港にも日本人の経営する貸座敷(娼館)やカフェーがあり、1886(明治 19)年の在留邦人名簿 162 名のうち約半数が、こうした場所で働く単身女性であった。

当時の香港は、コレラ、マラリア、天然痘などが風土病となっていて、健康な若者でも命を落とすリスクがあった。1890(明治 23)年 2 月、香港日本人慈善会が創設される。香港で最初の日本人による互助組織で、その役割は「施薬救護、埋葬建碑」とある。これは会費を払うと、病気になったときは薬を施して救護が受けられ、最期は埋葬して墓を建ててもらえる、という共済基金だ。言い換えれば、薬を買わずに亡くなり、墓を建てられない人が多かったのだろう。とくに 1894(明治 27)年からの 7 年間は、ペストの流行が繰り返されて大勢が亡くなっている。この墓地には、墓碑のない日本人の墓が 203 柱ある。墓地番号を記した小さな瓦礫が、そのまま墓標になっている。

ペストの流行後、これを教訓に衛生環境が改善されて、香港政庁は西洋医学に基づいた医療体制を整える。在留邦人数は増えていき、湾仔に布教所を開いた香港本願寺を中心に、婦人会や小学校がつくられる。慈善会は、会費や寄付を募るだけでなく、競馬場で馬券を売って収益を上げた。そして 1912(大正元)年に、日本人のための火葬場をハッピーバレーの郊外に建設する。遺骨を日本へ持ち帰れるようになると、この墓地へ埋葬される人数は減っていく。

第二次世界大戦のあと、日本人の縁故はいったん絶たれてしまう。1941(昭和 16)年 12 月、日本軍が香港に侵攻して、3 年 8 カ月にわたり占領する。そして 1945(昭和 20)年 8 月に終戦を迎え、イギリス軍が香港に再上陸したとき、日本人全員に強制退去を命じる。香港に長年暮らしていた人々も、家財や先祖の墓を残したまま、帰国しなければならなかった。日本人の墓は見守る人のいない無縁仏となり、戦後長らく放置されてしまうのだ。ようやく 1982(昭和 57)年になって、萬霊塔の移設をきっかけに整備が始まる。萬霊塔は、1919(大正 8)年に慈善会の火葬場に建てられた慰霊碑である。もともと香港スタジアムの近くにあったのを、香港政庁の要請を受けて、香港日本人倶楽部がこの墓地に移設した。1992(平成 4)年と 2000(平成 12)年にも日本外務省の支援を仰ぎ、大規模な整備事業を実施。こうした経緯から、倶楽部が墓地管理委員会を組織して、慰霊祭を毎年挙行している。

年代	合計	男性	女性	不詳
明治11~20年	33	18	9	6
明治21~30年	65	26	29	10
明治31~45年	285	130	83	72
大正2~15年	52	20	16	16
昭和2~20年	32	12	13	7
昭和20年~	3	2	1	0
	470	208	151	111

(出典：赤岩昭滋・著「香港の日本人墓地—船員の墓碑を中心として—」)



萬靈塔に献花して祈る慰霊祭
(倶楽部撮影)

(参考文献)

- 「香港の日本人墓地—船員の墓碑を中心として—」
1973年10月 運輸省鉄道監督局 赤岩昭滋(著)『海事史研究』21号(66～81頁)
- 『一写真集—香港日本人墓地』2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- 『香港事情』1917年5月 外務省通商局(編)国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956860> (コマ番号 189～194/198)
- Ko, Tim-Keung. 2001. “A Review of Development of Cemeteries in Hong Kong: 1841-1950.”
Journal of the Royal Asiatic Society Hong Kong Branch 41: 241-280.
- Lim, Patricia. 2011. *Forgotten Souls: A Social History of the Hong Kong Cemetery*. Hong Kong: Hong Kong University Press.

第1章 フランス文豪と出会った陸軍留学生 湯川温作 1878(明治11)年8月5日没 享年22

湯川温作は、この墓地に最初に埋葬された日本人で、その墓碑はひととき大きく立派である。「陸軍少尉」の肩書だが、湯川は戦場に赴いたのではない。長州(現・山口県)に生まれ、藩校でフランス語を学んだのち、陸軍省の公費留学生に選ばれる。そして1872(明治5)年11月2日に横浜港を出航し、香港経由でマルセイユに渡った。このとき、まだ16歳である。

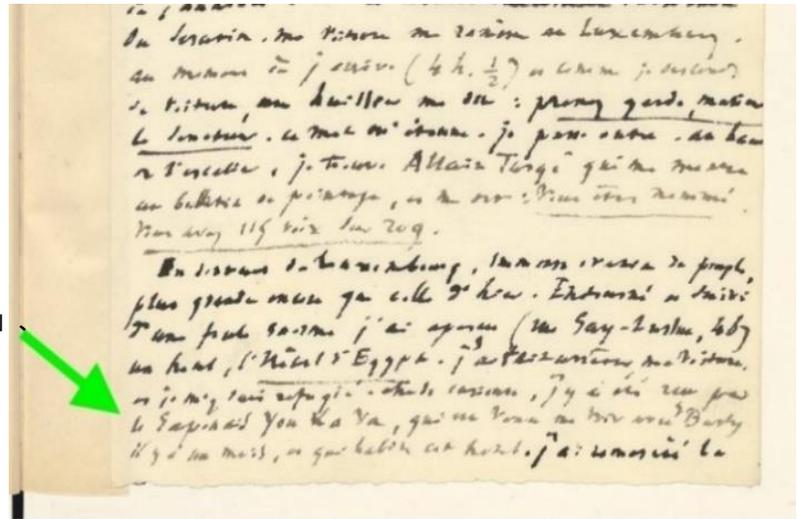
湯川は、フランス滞在5年目にして、首都パリの最高学府 École Polytechnique (エコール・ポリテクニーク)の入学許可を得た。無事卒業すれば、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』に書かれた秋山好古のように、フランス帰りの士官として活躍したであろう。だが不運にも脳の病気に侵されてしまう。1878(明治11)年6月30日、陸軍中将の小阪千尋、軍吏補の廣寅一が付き添い、フランス汽船「ジェムナ号」で帰国の途につく。しかし、湯川は約1カ月の航海中に危篤となり、香港で亡くなった。1878(明治11)年8月5日、なお22歳という若さ。香港では1873(明治6)年4月20日に日本領事館が開設されていて、寺田一郎・書記生がこの墓地に小阪と廣を案内して、湯川の埋葬を執り行った。

『レ・ミゼラブル』の著者でフランスを代表する文豪、ヴィクトル・ユーゴーの日記に、湯川が登場する。「わたしはそこで日本人の You Ka Va に迎えられた。ひと月前にビュルティとやってきた男で、このホテルに住んでいる」(1876年1月30日)。ユーゴーはこの日、上院議員に当選した。熱狂する群衆を避けて飛び込んだホテル・エジプトで期せずして湯川に再会した、と書いている。当時フランスでは日本美術ブームが起きていた。日本が初めて参加した1867年のパリ万国博覧会の影響である。なかでも「ジャポニスム」を提唱

した美術評論家のフィリップ・ビュルティは、浮世絵のコレクターとして知られており、湯川と親交があったようだ。

さて日本人墓地に話を戻そう。湯川の斜め後ろには、海軍の一等若水兵、清水政之助の墓がある(S27/3/15# 墓地番号 4421)。軍艦日進の乗組員で 1879(明治 12)年 5 月 10 日、湯川と同じ 22 歳の若さで病死した。明治の黎明期には、日本の将来を担う若者たちが、欧米各国に派遣されている。近代化を進める日本は、陸軍をフランスに、海軍をイギリスに学んでおり、イギリス植民地の香港は、欧州への中継地となっていたのである。

ユーゴーの日記に「le Japonais You Ka Va」
「日本人のユ・カ・ワ」が登場する
(フランス国立図書館「Gallica」所蔵)



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France. Département des Manuscrits. IIAF 13480



大日本陸軍少尉 湯川温作墓 S27/2/14 (墓地番号 4372)
正面にある大理石の墓碑は、フランス語で記されている

(参考文献)

- 「明治初期のあるフランス留学生:湯川温作」 1992 年 10 月 奥村功(著)
立命館大学言語文化研究紀要4巻1号(89~106 頁)
『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』 1995 年 3 月 西川長夫・松宮秀治(編)新曜社
- 『明治初期に於ける香港日本人』 1937 年 1 月 奥田乙治郎(著)
台湾総督府熱帯産業調査叢書<第5号>
- 『一写真集一香港日本人墓地』 2006 年 3 月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- Bibliothèque nationale de France. Fonds Victor Hugo. III -- CARNETS. 1er janvier-31 décembre 1876. Page 15r.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b530382945/f33.item>

- Maejima, Michiko. 2014. “Édifier et équiper les bases de l’armée japonaise: Transferts de technologie, France-Japon 1868-1930.” Doctoral thesis for the Conservatoire national des arts et métiers (CNAM).
https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-01124311/file/2014CNAM0912_annexe.pdf
- *The China Mail*, November 18, 1872
- *Hong Kong Daily Press*, August 5, 1878

第2章 香港航路を開いた三菱初代支配人

本田政次郎 1880(明治13)年11月2日没 享年35

三菱グループの創始者である岩崎彌太郎は、土佐藩(現・高知県)の貿易会社「九十九商会」を受け継ぎ、明治新政府の信任を得て「郵便汽船三菱会社」と社名を改める。三菱は上海に続いて香港航路を開拓。1879(明治12)年10月12日、新潟丸 2,032トンが、日本の商船として史上初めての香港入港を果たした。

イギリスの支配する航路に新規参入した三菱は、新潟丸の船上で華やかな昼食会を催した。この催しにあたり、岩崎彌太郎が香港領事の安藤太郎に協力を仰ぎ、安藤領事は外務卿(外務大臣に相当)の井上馨にその成果を報告している。香港航路の開拓は、国を挙げての大事業だったといえる。昼食会には、ジョン・ポープ・ヘネシー香港総督はじめ 60 名以上の名士たちが出席した。「クイーンのために」「ミカドのために」。互いの国家元首を称えて乾杯するのは、外交の場で重んじられる国際儀礼(プロトコール)だ。

「ジェントルマン、まことに、ありがとう」。三菱香港支店の初代支配人である本田政次郎は、このとき日本語で挨拶をした。前職は用度局事務長である。資材調達を担当していた本田には、初めての海外勤務で航路開拓という重責を担い、大勢の外国人に囲まれて格式の高い祝宴を催すなど、日々緊張の連続だったろう。安藤領事は、彌太郎の弟で三菱副社長の彌之助に手紙を送っている。香港に単身赴任していた本田の激務を案じて、日本から家族を呼び寄せるように、と助言したのだ。その心配が的中したのか、香港就航を成し遂げた翌年、本田が肺結核のため逝去する。1880(明治13)年11月2日(墓石は12月2日と刻印)、まだ 35 歳の働き盛りであった。その半年後、支店職員の邨上秀士も 21 歳の若さで亡くなり、日本人墓地に並んで永眠している(S31/4/3#墓地番号 4532)。

郵便汽船三菱会社は、三菱グループの起源であると同時に、海運業においては共同運輸と合併して日本郵船となり、日本経済の中核を担っていく。



明治10年頃の三菱幹部。本田は後列左から2人目、口髭を生やして三つ揃えの背広を着こなす
(提供：三菱経済研究所)



本田政次郎之墓 S31/4/5 (墓地番号不詳)
右隣には邨上の墓がある

(参考文献)

- 「近代日本海運とアジア」 1995年3月 片山邦雄(著) 京都大学学術情報リポジトリ 紅 KURENAI https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/68503/1/D_Katayama_Kunio.pdf
- 『一写真集一香港日本人墓地』 2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- *The China Mail*, October 12, 1879.
- *The China Mail*, November 13, 1879.
- *The Hong Kong Daily Press*, November 4, 1880.
- Births and Deaths General Register Office, Immigration Department, Government of the Hong Kong Special Administrative Region

第3章 女性たちが建てた「からゆきさん」の墓

木谷サキ 1884(明治17)年6月8日没 享年30

明治時代、香港には日本人女性が働く貸座敷(娼館)やカフェーがあった。女性の多くは10~20代、天草諸島(熊本県)や島原半島(長崎県)からの出稼ぎである。ここは江戸時代にキリシタンが隠れ住んだ地域でもあり、暮らしぶりは貧しかった。豊かな生活にあこがれて海外を目指す人もいただろうが、ほとんどは家計を助けるために身売りしたのである。海外の娼館で働く女性たちの物語は、のちに小説や映画の題材となり、「唐行きさん(からゆきさん)」と呼ばれている。言葉の通じない海外で、若い女性がすぐ稼げる仕事といえば、裕福な外国人相手の売春だった。しかも女性たちは、自らの渡航費用まで借金として背負われる。そして借金を完済するまで、娼館を離れることは許されなかった。

「からゆきさん」の存在を示すのは、当時の在留邦人名簿である。1886(明治19)年6月、計162名の内訳は、男66対女96で女性が上回る。さらに「職業」の欄をみると、女性の7割以上が、貸座敷やカフェーの女給、外国人の「抱へ女」(妾)である。一方、男性は短期滞在の船員が16名と最も多く、日本企業の駐在員は10名足らず。このほか瀬戸物(陶磁器)商、呉服店、仕立物、髪結、貸座敷やカフェーの主人たちである。この業種を見ても、当時の在留邦人が娼館の女性を中心に生計を立てていた様子がわかる。

中には、自ら娼館の経営者となった女性もいる。しかし、「からゆきさん」の大半は貧しいまま一生を終える。長崎県出身の木谷佐喜(サキ)はセントラル・グラハム・ストリート(嘉咸街)27号の娼館で働いていた。彼女は、30歳になっても借金を返せずについて、病気の父親に会いに行けないことを嘆き悲しんだ。ついに

父親の訃報が届き、情緒不安定になったサキは、店を飛び出したまま戻らず。その翌日、ビクトリア湾に着物姿の女性が浮かんでいるのが見つかった。香港警察は、この遺体がグラハム・ストリート 27 号のサキであると発表。「着物の袖に重石を結び付けてあり、海に身を投げたのだろう」と現地の英字紙が報じている。サキの冥福を祈り、仲間の女性たちがお金を出し合って墓を建てた。墓碑には「友人たちが建てた」と英語で記し、その台座には、キク、コト、エイ、マツ、サツ…、カタカナ 2 文字ずつ 62 人の名前が寄書きのように刻まれている。



木谷佐喜女之墓 S31/4/24 (墓地番号 4713)
背の高い墓石に 2 段の台座、地面の墓碑は「KIYA SAKI」



台座の正面 4 段にわたり、カタカナ 2 文字
の女性の名前が 62 人分刻まれている

(参考文献)

- 『明治初期に於ける香港日本人』 1937 年 1 月 奥田乙治郎(著)
台湾総督府熱帯産業調査叢書<第5号>
- 『一写真集一香港日本人墓地』 2006 年 3 月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- *The China Mail*, June 10, 1884.

第4章 香港に生まれた、三井支配人の娘

福原香世 1892(明治 25)年 5 月 28 日没 生後 5 カ月

旧三井物産(※注)は、創立 3 年目の 1878(明治 11)年 8 月、「三井洋行 Mitsui Bussan Kaisha」の名で、香港に進出する。上海、パリに続く 3 番目の海外店舗で、ニューヨーク、ロンドンよりも早い。香港への進出は、明治初期に日本政府が推し進めた貨幣政策と連動している。

当時、清国では貿易決済の通貨としてメキシコドル銀貨を用いていた。イギリス政府は、植民統治の初めに香港ドル銀貨(Hong Kong Dollar)をつくり、「圓」という中国語の通貨単位も刻印したが、中国系商人には不評で流通しなかった。そこで香港ドルの発行をあきらめて、不要になった鑄造機を売り払おうと考える。一方、日本では、江戸時代の小判「両」に代わる通貨が必要となり、明治新政府がイギリス人の技術者を雇い入れて中古の鑄造機を買い受けた。こうして香港ドルの鑄造機から、新しい日本の通貨「圓」が生まれたのである。

さらに大蔵卿(財務大臣に相当)の大隈重信は、貿易取引の為替リスクを抜本的に解消する策として、アジア各地で日本円をそのまま流通させようとする。大隈の意を受けた三井は、渋沢栄一の率いる第一国立銀行と協力して香港に進出する。大隈はまた、ジョン・ポープ・ヘネシー香港総督を日本に招待して 3 カ

月の間もてなし、日本円を香港の法定通貨とするよう働きかけた。しかし、最終的にイギリス本国の認可が下りず、この計画は頓挫してしまう。そして1882(明治15)年1月に三井は香港出張所を閉鎖する。再び出店したのは4年後の1886(明治19)年1月、官営三池炭鉱で増産した石炭の販路拡大のためだった。

三井は創立当初から、高等学校卒(大卒に相当)の新入社員を海外に派遣し、幹部候補生として育成した。その一人、慶應義塾卒の福原榮太郎は、外務卿となった井上馨の甥で、1886(明治19)年2月、26歳のとき香港に赴任する。福原の活躍は目覚ましく、石炭とコークスの取引を香港から海外へ展開、綿糸やコマなど取扱品目を増やし、日本製マッチの輸入では香港市場を独占した。

そして6年後の1892(明治25)年1月5日、長女が誕生して香世と名付ける。その年の4月30日には、香港出張所が上海支店から独立したのを機に、福原は支店支配人へと昇格した。しかし、その喜びもつかの間、香世がひきつけを起こして亡くなってしまう。「福原香世子之墓」と刻まれた小さな墓石。「子」の文字を添えたのは、幼い子供を意味したのか、皇女にあやかって女性の呼び名に「子」をつけるのが流行った頃だったからか。どちらにしても、わずか5カ月で失くした子を愛おしむ、親心であろう。まだ言葉を発することができず、自らの名前を言えぬまま逝ってしまった娘、香世子。ハッピーバレーの丘に我が子を埋葬した翌年、福原は香港を去る。ロンドン勤務などを経て、のちに小野田セメント3代社長となった人である。

(※注)法的には、旧三井物産と現在の三井物産には継続性はなく、まったく別個の企業体である。



ヘネシー総督一家の日本旅行。井上馨、大隈重信、香港領事の安藤太郎が夫人同伴でもてなした。後列右から3人目がヘネシー総督、左から2人目が安藤領事(出典:江森泰吉・編『大隈伯百話』)



福原香世子之墓
S28/6/2(墓地番号5434)
幼子を思わせる、小さな墓石である

(参考文献)

- 「香港総督ジョン・ポープ・ヘネシーと大隈重信—大隈財政と条約改正における御雇外国人—」
2006年9月 重松優(著)『社会学論集』Vol.8(239~256頁)早稲田大学リポジトリ
https://waseda.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=15965&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- 『大隈伯百話』江森泰吉(編)1909年 実業之日本社
- 「三井物産草創期の海外店舗展開とその要員」2000年12月 木山実(著)
『経営史学』第35巻3号(1~26頁)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/bhsj1966/35/3/35_3_1/_article/-char/ja/
- 「小野田セメント(株)百年史」1981年8月 渋沢社史データベース
https://shashi.shibusawa.or.jp/details_siryu.php?sid=4180&query=%E7%A6%8F%E5%8E%9F%E6%A0%84%E5%A4%AA%E9%83%8E

- 『一写真集—香港日本人墓地』 2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- MacKeown, P. Kevin. 2020. *A Stormy Petrel: The Life and Times of John Pope Hennessy*. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
- Births and Deaths General Register Office, Immigration Department, Government of the Hong Kong Special Administrative Region.

第5章 銀を金に換えた横濱正金バンカー

廣田耕吉 1900(明治33)年7月30日没 享年29

横濱正金銀行は、1880(明治13)年2月に開業した。そして第二次世界大戦後の1946(昭和21)年に清算されるまで、外国為替を扱う特殊銀行として日本経済の支柱となっていた。香港に進出するのは、1896(明治29)年9月15日である。その前年に日清戦争が終結した。戦争の勝利は、国の在り方を大きく変えていく。

講和条約で日本が得た賠償金は、約3億6千万円。国家予算の3年分に相当する大金だ。日本政府はこれを元手に、金本位制への転換を図る。金本位制とは、金(ゴールド)を裏付けとして紙幣を発行する貨幣制度である。つまり、保有する金の多さが、国の経済規模、すなわち国力を示すものとなる。日本はまだ、金の保有高が十分ではなく、貿易決済に円銀貨(貿易銀)を用いていた。一方、イギリスのポンドやアメリカのドルは、金との交換を約束した兌換紙幣だった。

アジアの銀貨圏から脱して、欧米の金本位制の仲間入りをする。いわば金融の「脱亜入欧」である。世界の一等国に追いつくことは、明治維新からの念願であった。清国から受け取る賠償金を、日・清双方で通用する銀貨ではなく、外国の通貨である英ポンド建てにしたのは、そのためだ。そして日本政府は、賠償金をロンドンで受け取ると、ほとんど日本円に換金することなく、正金ロンドン支店に預けた。英ポンド建ての預金であれば、金の保有資産としてみなされるからだ。

こうして準備が整い、1897(明治30)年10月、日本の金本位制が成立。そこから香港の出番となる。正金の香港出張所は「独立店」という立場で、為替ポジションを独自に管理していた。土地柄、中国系商人との取引もある。すでに日本政府は、貿易に使用する円銀貨の発行を止めていたが、なおアジアには大量の円銀貨が流通している。正金の香港出張所は、日常の決済業務のなかで円銀貨を回収していった。また、日本政府が保有していた銀塊を売却する、という役目も引き受けた。

それまでに日本政府が発行した貿易決済用の銀貨は、新旧の円銀貨と貿易銀の3種あり、総額1億6000万円にのぼった。これらをすべて回収して、溶かしたうえで銀塊にして売る。そうして得た収入で、今度は金を買うのである。まとめて売り買いすれば、銀の相場が急落し、金の価格が高騰してしまう。この相場変動のリスクを回避するため、日本政府は正金に銀を貸し付けたのであろう。正金の社史によれば、香港出張所の開設時1896(明治29)年50万ドルであった銀の資金残高は、1899(明治32)年に239万ドルまで増えている。正金は、日本政府から借入れた「銀」の資金を、日常業務のなかで「金」の資金に換えて国庫へ戻すのだ。金と銀、双方の相場を注視しながら、銀を売り抜け、徐々に金を買って増していく。香港の正金バンカーたちは、日々の為替取引に心血を注ぎ、そして10年の歳月を費やした。

廣田耕吉は石川県出身。香港出張所が開設された1896(明治29)年からの駐在員である。そして、香港が支店に昇格した1900(明治33)年に副支店長となる。9名いた支店行員の中でも、廣田は香港の業務に精通し、さらにナンバー2となつて、より一層、職務に励んだに違いない。そして哀しいことに、その年の7

月に29歳で亡くなってしまふ。その墓の近くには、支店行員の中園修吾が永眠している(S6/3/22#墓地番号7088)。廣田の死から6年経った1906(明治39)年6月18日、27歳の中園が、感染症ペストに命を奪われる。なお正金の社史によれば、1906(明治39)年5月、香港支店は銀の資金残高をすべて上海支店に移管している。中園が亡くなったのは、香港における銀売却の任務が終了した翌月であった。

横濱正金銀行は、第二次世界大戦で日本が降伏したあとGHQから閉鎖機関の指定を受けて清算されるが、その業務は東京銀行(現・三菱UFJ銀行)に引き継がれた。東京銀行が香港に進出するのは、1953(昭和28)年のことである。

銀塊處分の結末
 我政府所有の銀塊の昨年以來香港及海峽殖民地等に於て大半處分せられ猶泰來支那爲替を買入れ倫敦に於て金塊と爲し漸次現送せられ昨今の所にてハ臺灣銀行へ貸與の二百萬圓を除き残餘ハ一千萬圓内外となり其内三百萬圓を正金銀行の手を以て紡績業者に融通せしめ居り他ハ香港上海銀行等に預託しある次第にて先頃民間の有力者某の手を以て之が始末方を爲さんとしたるも相談折合はず其儘に成り居れるが目下之を金塊に換ふるに最も便益なる方法に就き計畫中なりと云へば遠からず全部の始末を終るべしとなり



金本位制の導入後、銀を処分する顛末を報じた『東京朝日新聞』1899年4月20日朝刊

廣田耕吉之墓 S6/3/12 (墓地番号6277)
 廣田も中園も墓石の背面には「横濱正金銀行」の文字が刻まれている

(参考文献)

- 『横濱正金銀行全史』第2巻「創立から関東大震災まで」1981年4月 東京銀行(編)
- 「横浜正金銀行のあゆみ」神奈川県立歴史博物館ウェブサイト
https://ch.kanagawa-museum.jp/dm/syoukin/ysb_ayumi/m_ayumi.html
- 「日清戦争賠償金の領収と貨幣制度—日本における金本位制の成立(3)—」1964年9月 小野一一郎(著)『經濟論叢』第94巻第3号 京都大学経済学会
- 『一写真集—香港日本人墓地』2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- *The Hongkong Directory and Hong List for the Far East*. 1900. Published by the Daily Press Office.
- *The Hongkong Directory and Hong List for the Far East*. 1901. Published by the Daily Press Office.

第6章 総合商社の源流となった香港ドリム

堀井彌三郎 1904(明治37)年6月20日没 享年25

堀井彌三郎は、明治の商社マンだ。勤務先の日森(ヤッシュム)は、香港を拠点とした日系企業の草分け的存在で、名だたる総合商社の源流となった会社である。

堀井の墓石は、どっしりと構えた厚みに特徴があり、その墓碑からは多くの情報が読み取れる。正面は「堀井彌三郎之墓」、背面には出身地と享年、そして「寶船英徹信士」という戒名が刻まれている。言うなれば「宝船を操るエリート」、まさに商社勤務の堀井に贈られた賛辞である。そして左右の側面には、この墓を建てた人として日下部平次郎と安宅彌吉の名が並んでいる。彼らは日森の創業社長と香港支配人、堀井はその部下という関係だ。日下部は京都府丹波、安宅は石川県金沢と出身地は異なるが、ともに香港で成功して名を挙げた。滋賀県生まれの堀井も、「香港ドリーム」を体現する二人を目標に、立身出世を夢見て海を渡ったのだろう。

日下部は、道修町の薬問屋で修業した大阪商人で、明治の初めに香港を訪れて貿易を志す。大阪では日下部商店、香港では日森の屋号を用いた。日本の瀬戸物(陶磁器)を売り、オークションで競り落とした品物を日本へ輸出。上海にも店を出す傍ら、廣業商會の香港支配人を兼務した。廣業商會は、対中貿易の荷為替発行を一任された政府系の商社で、北海道のアワビや干し鱈、寒天といった海産物のほか、マッチ棒や雨傘などの生活用品も扱っていた。

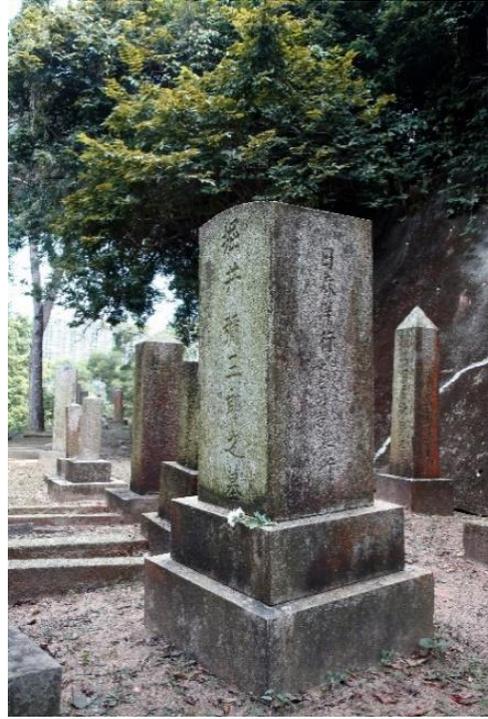
一方、安宅は東京高等商業学校(一橋大学の前身)を卒業して、大阪の日下部商店に入社した。香港に派遣された安宅は、砂糖取引に活路を見出す。インドネシア最大手の中国系商人「建源號」と組み、ジャワ島の原料糖買付に独自のルートを築いて莫大な利益を上げた。

堀井が腸チフスを患って亡くなった 1904(明治 37)年、日下部と安宅にも転機が訪れる。大阪の日下部商店が倒産。安宅は、安宅商會(のちの安宅産業)を設立して、日森を傘下に収める。しかし安宅も、マカオの辰丸事件や台湾の日糖事件に巻き込まれて苦境に立たされる。そして 1913(大正 2)年、日森の業務を切り離して、神戸の砂糖問屋「鈴木商店」に売却する。鈴木商店は女性社長のもと急成長した会社で、大正期に売上高日本一の総合商社となる。だが、第一次世界大戦後のデフレと急成長の反動から経営破綻してしまう。このとき、主だった社員が事業を継承して日商を設立し、その系譜は日商岩井から双日へとつながっている。

安宅産業はその後、昭和の高度成長期に「十大総合商社」と称される超一流企業に成長するも、第一次オイルショックで経営危機に陥り、伊藤忠商事に救済合併される。明治、大正、昭和にかけて経営の第一線で活躍した安宅は、大阪商工会議所会頭を務めた財界人というだけでなく、篤志家としても名高い。禅の思想を英訳した仏教学者の鈴木大拙が、まだ貞太郎と名乗っていた時分から物心両面を支え、代表作となった『Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture(邦題:禅と日本文化)』の出版費用を負担、そのネットワークを以て国内外の研究機関に本を寄贈した。禅(ZEN)を世界に広めたのは、安宅の力ともいえるだろう。アートの才能を見極めて支援するパトロン気質は、香港で生まれた長男、安宅英一に受け継がれた。英一が蒐集した東洋の美術品は「安宅コレクション」と呼ばれ、大阪市立東洋陶磁美術館に収蔵・展示されている。



「Directory and Chronicle1904」香港年鑑 1904 年版
日森 (Yat-sum) には日下部、安宅、堀井の名前があり、
海上保険と砂糖取引の代理店として記載されている



堀井彌三郎之墓 S35/2/4 (墓地番号 6831)
左右両面に安宅と日下部の名が並んでいる

(参考文献)

- 「1900～1920年代東アジアにおける砂糖貿易と台湾糖」 2007年5月 平井健介(著)
『社会経済史学』73—1(38～39頁)
- 「問題提起—総合商社の源流」 1966年8月 宮本又次(著)
『経営史学』第8巻第1号
- 「明治・大正期における商社の研究」 1994年3月 中川清(著)
白鷗大学論集 Vol.8No.2 研究ノート(224～228頁)
- 鈴木商店記念館ウェブサイト
<http://www.suzukishoten-museum.com/>
- 『一写真集—香港日本人墓地』 2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- *The Directory & Chronicle*. 1903. Published by the Hong Kong Daily Press.
- *The Directory & Chronicle*. 1904. Published by the Hong Kong Daily Press.

第7章 孫文を支援した日本人と「辰丸事件」

照峰廣吉 1908(明治41)年3月28日没 享年33

1908(明治41)年2月5日、神戸辰馬商会の汽船「第二辰丸」が、マカオ沖に停泊中、清国の巡視船に取り囲まれた。船長の照峰廣吉は、武器密輸の嫌疑をかけられ、船ごと身柄を広東へと送られる。「辰丸事件」である。照峰は42日間にわたり拘留され、釈放前日に急性肺炎を起こして帰らぬ人となる。その死を悼む新聞報道によれば、照峰は陸軍省より勲章を賜り、神戸に帰還したら結婚の準備が整っていた、という。

清国政府は当時、孫文が日本の支援を受けていると警戒して、日本からの商船を監視していた。「打倒清朝」を唱える孫文は、1895(明治28)年、最初の武装蜂起に失敗した後しばらく日本で暮らした。そして宮崎滔天らの支援を得て、アメリカ、イギリスに渡り、再起を図っている。こうした国際情勢において、第二辰丸は、孫文との関係を疑われたのである。

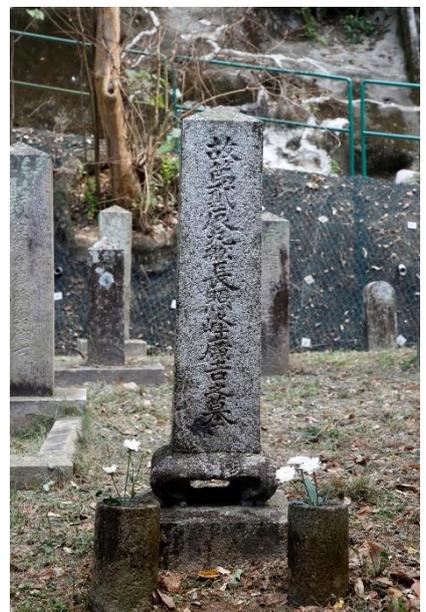
事件の解決にあたり、日本政府が交渉に臨んだ。神戸港で積み込まれた小銃94箱(1,500挺)弾薬40

箱(4万発)は、大阪栗谷商店—安宅商會—澳門広和号による、マカオ政庁が認めた正規の輸出、と主張。日本の新聞各紙もこれに同調した。このとき『釧路新聞』の記者であった石川啄木は、「一刻も早く事件の解決を告げんことを希望す」と3月1日付の紙面に書いている。遠く北海道にも及んだ世論の高まりを受け、西園寺公望・内閣は、海軍艦隊を中国近海へ向かわせる。武力衝突を恐れた清国政府は、日本政府の要求をすべて受け入れた。このため広東では、全面的に譲歩した清国政府への批判とともに、史上初めて日本製品のボイコット運動が起きている。

「辰丸事件」は、日中関係を揺るがす一大事となった。そもそも清国政府が日本を警戒したのは、のちに「中国革命の父」と称えられる孫文が、いったん日本へ亡命して、日本人の支援を受けて復活したからだ。では、なぜ孫文は、実の兄が暮らすハワイではなく、日本へ亡命したのか。そこには、長崎県出身で香港に暮らした実業家、梅屋庄吉との信頼関係があった。梅屋は映画会社「日活」創始者の一人で、香港で手掛けた写真館が成功の始まり。まだ若く、起業したばかりの梅屋と、革命の志を抱く孫文との出会いは、1895(明治28)年のこと。孫文の恩師である英国人医師ジェームス・カントリーが、パーティー会場で二人を引き合わせた。その数日後、写真館を訪れた孫文に、梅屋は熱く語りかける。「君もし兵を挙ぐるなら、我財を以て支援せん」。梅屋27歳、孫文29歳。このときから二人は生涯の盟友となったのである。



梅屋庄吉・トク夫妻と孫文
(出典：小坂文乃・著『革命をプロデュースした日本人 評伝 梅屋庄吉』)



故第貳辰丸船長照峰廣吉之墓 S34B/1/7 (墓地番号 7323)
墓前に花を供える円筒2つが特徴

(参考文献)

- 「中国初期日貨排斥運動と日本」 2006年12月 徐小潔(著)
2007年3月 神戸大学大学院総合人間科学研究科 学位論文#甲 2873
- 「辰丸事件の真相」 1908年3月1日『釧路新聞』 石川啄木(著)
『石川啄木全集』第8巻 啄木研究 1966年1月 筑摩書房(492～493頁)
- 「故辰丸船長性格(神戸)」『東京朝日新聞』1908年3月29日朝刊
- 「孫文 梅谷庄吉と長崎」 長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館ウェブサイト
<https://tabinaga.jp/sonbunumeya/>
- 『革命をプロデュースした日本人 評伝 梅屋庄吉』 2009年11月 小坂文乃(著)講談社
- 「辛亥革命以前梅屋庄吉在香港的活動(辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動)
呉偉明(著)「辛亥革命與亞洲」横浜会議<2011年11月5日～7日>報告論文 合田美穂(訳)
[静岡産業大学学術機関リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://www.nii.ac.jp)
- 『一写真集—香港日本人墓地』 2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会

第8章 競馬場大火災で亡くなった旅館の主人

松原治三郎 1918(大正7)年3月7日没 享年54

松原治三郎は、香港島セントラルのビクトリア湾岸に建つ「松原旅館」の主人である。1905(明治38)年に開業した旅館は、東南アジア各地へ向かう「からゆきさん」や木曜島で働くダイバーたちの定宿となっていた。木曜島とは、オーストラリア北部のトレス海峡にあるサンゴ礁の小さな島で、白蝶貝の生息地である。白蝶貝は貝殻が高級ボタンの原料となって高値で売れる。この収穫のため、「世界一の真珠取り」と称賛された日本人ダイバーの移民が盛んだった。

上海では1901(明治34)年に東亜同文書院が設立される。近衛篤磨らが設立した高等専門学校で、中国事情と貿易実務に通じた人材を育成した。学生たちは中国語をマスターすると、中国各地へ調査旅行に赴く。その記録『大旅行誌』によれば、香港では松原旅館をよく利用していた。セントラルの埠頭近く、コンノート・ロード(干諾道)19号にあり、学生には雑魚寝のできる大広間や屋根裏部屋を安価で提供したという。松原は香港日本人コミュニティの世話役という風情だったのだろう。

1899(明治32)年、浄土真宗本願寺派(西本願寺)第22代法主、大谷光瑞が香港を訪れる。このとき大谷は、日本人の互助組織をつくる資金として500ドルを寄付していった。これをもとに日本倶楽部が設立されたのは、1905(明治38)年のこと。領事館員、商社や銀行の駐在員によるテニスクラブ「大和會」が中心となり、セントラルのアイスハウスストリート(雪廠街)に部屋を借りた。ビリヤード台を置いて、囲碁・将棋をたしなみ、新聞や雑誌を閲覧する、「上町(山手)の社交場」といった趣であったようだ。1907(明治40)年3月には、倶楽部レストランとバーの経営を、松原が請け負っている。なお、この「上町」の倶楽部とは別に、新聞記者、旅館や写真館の主人、香港本願寺の布教所と診療所の医師ら「下町」の者たちが集まり、日本人懇話会を組織した。

これよりも先、1890(明治23)年2月には、香港日本人慈善会が設立されている。慈善会は、まず会費を集めて、会員が病気になったときには医療費や葬儀代を支援する、いわゆる共済基金である。やがて本願寺の布教所が、慈善会の集会所となり、婦人や子供たちの世話をした。また、1894(明治27)年からのペスト流行時に大勢が亡くなって多額の費用がかかった経験から、慈善会は1909(明治42)年に規約を改定して競馬事業に乗り出す。なんと馬券を売って金を稼いだのだ。その資金力は、土葬が一般的だった当時の香港で、日本人専用の火葬場を建てるまでになった。

松原は、倶楽部にも懇話会にも属していたうえ、慈善会に多額の寄付をする有力者であった。1918(大正7)年2月26日、ハッピーバレー競馬場で、新春恒例のダービー競走が開催された。大勢の観客でにぎわう中、松原は妻を伴って競馬観戦に訪れる。中国人、日本人、インド人などアジア系の人々は当時、欧米人の集うクラブハウスではなく、屋外に建てられたテントで観戦していた。その日、3階建てのテントが観客の重みで崩れ、階下にあった屋台から出火。松原はこの火事に巻き込まれて54歳の生涯を閉じた。日本政府から勲七等を授与された料亭旅館「清風楼」の主人、植月覚三も火事の当日に亡くなっている。享年45。(S35/2/27#墓地番号8269)

ハッピーバレー競馬場の大火災は、香港史上最多の死傷者を出した火災事故であり、日本人22名を含む600人以上が命を落とした。その1年後の1919(大正8)年2月26日、大谷光瑞の書を彫った慰霊碑「萬霊塔」が、火葬場のそばに建てられたのである。

1918年2月26日に発生したハッピーバレー競馬場の大火災



松原治三郎夫妻之墓 S31/4/1 (墓地番号 8285)
右側面の墓碑に、妻の享年は刻印されていない。競馬場の大火災で亡くなったのは松原本人だけであったか

(参考文献)

- 「オーストラリア・木曜島に渡った日本人の足跡を追う—藤井富太郎の生涯から考える—」
2012年3月 伊井義人・青木麻衣子(著)『藤女子大学紀要』第49号(1~9頁)
- 「東亜同文書院とそのあゆみ・大旅行」2009年11月3日 藤田佳久(講演)
『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2009年度版4号
- 「『大旅行誌』の思い出に記された香港—昭和期の記述より—」2018年3月 塩山正純(著)
『文明21』第40号(42~43頁)愛知大学
- 『香港事情』1917年5月 外務省通商局(編)国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956860> (コマ番号 189~194/198)
- 『一写真集—香港日本人墓地』2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会
- 「馬場大火 100周年祭」2018年3月3日 鄭明仁(著)灼見名家 Master-Insight.com
<https://www.master-insight.com/%E9%A6%AC%E5%A0%B4%E5%A4%A7%E7%81%AB100%E5%91%A8%E5%B9%B4%E7%A5%AD/>

第9章 異郷に眠る人々の慰霊碑

萬霊塔 1919(大正8)年2月26日建立
河津桜 2004(平成16)年2月14日植樹

萬霊塔は、日本人の建てた慰霊碑である。1918(大正7)年2月26日、ハッピーバレー競馬場で大火災が起きて、日本人22名を含む600人以上が犠牲になった。1年後の1919(大正8)年2月26日、一周忌の法要が行われたのだろうか、香港日本人慈善会が運営する火葬場の敷地に、大きな石碑が建てられた。

篆書体で刻まれた「萬霊塔」の文字は、浄土真宗本願寺派(西本願寺)第 22 代法主、大谷光瑞の筆である。大谷は、中央アジア調査団「大谷探検隊」でその名を知られるが、そもそもは日本仏教の国際化を目指す先代法主の意向により、英語教育を受けて海外へ赴く。ロンドン、ウラジオストク、満州、上海、台湾、香港、シンガポールなどをめぐり、布教活動と併せてマレー半島のゴム園やジャワ島のコーヒー園を経営した。大谷はまた、現地に暮らす日本人の相互扶助にも配慮している。ゆえに、これらの地域では本願寺の進出に伴って日本人コミュニティーが組織化されていく。

大谷は 1899(明治 32)年に日本人の互助組織をつくる資金として 500ドルを寄付している。そうして 1905(明治 38)年、日本倶楽部が設立される。倶楽部は、領事館、銀行、商社の駐在員を中心とした上町(セントラル)の社交場となっていて、下町(灣仔)に店を構える経営者たちは入会できずに、日本人懇話会を組織して対抗した。こうした互助組織が、かえって日本人コミュニティーを分断させてしまう。在留邦人数の増加に伴い、1909(明治 42)年には領事館が総領事館に昇格するが、総領事代理領事となった船津辰一郎は、この上町と下町の融和に、かなり腐心している。

一方、本願寺の進出より早く、1890(明治 23)年 2 月に香港日本人慈善会が創設されている。慈善会は会費制で運営する共済基金で、病気になったときの支援や葬儀の手配をしていた。また、1900(明治 33)年には、本願寺派僧侶の高田栖岸が単身来港した。香港で写真館を営む梅屋庄吉が、同郷人の墓を見つけて、知り合いの僧侶に供養を頼んだのだ。高田は香港に暮らすことを決め、ワンチャイロード(灣仔路) 117 号の居所で、日本人の子供たちに歴史や孟子の教えを説いた。これが日本人小学校の前身となる。香港本願寺の正式な開教は、1907(明治 40)年 2 月まで待たねばならないが、布教所には女性たちが料理や編み物を習いに集まり、仏教婦人会が組織された。

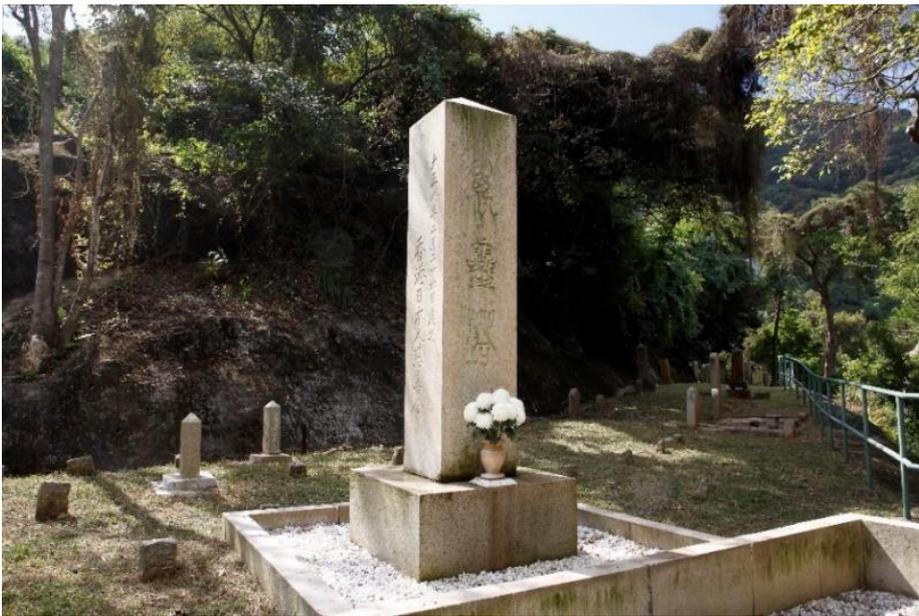
そのころ香港では、馬券の販売が資金源となって、日本人コミュニティーの活動を支えていた。慈善会は 1909(明治 42)年に競馬事業を興して、これを元手に、日本人のための火葬場を掃桿埔(現在の香港スタジアム付近)に建設したほか、教育部と共済部という組織を備えていた。教育部では、高田僧侶の寺子屋に始まった小学校を運営し、共済部では、香港本願寺の信者たちが協力して地域医療に携わっていたようだ。1910(明治 43)年 4 月 10 日に 42 歳で亡くなった梅津サミは、浄土真宗の法名「釈尼妙信」の下に英語で「NURSE SAMI UMETSU」とある。英語を併記した日本人の墓は数少ないが、看護師であった彼女を慕う人がいたのだろうか(S34C/3/4# 墓地番号 7634)。

第二次世界大戦のあと、日本人全員が強制退去させられたため、これら日本人の互助組織はすべて廃止される。再び組織されるのは、1955(昭和 30)年に設立した香港日本人倶楽部である。なお日本人の墓は、墓を守る家族がいなくなったことで、長らく放置されてしまう。

1982(昭和 57)年、香港政庁から萬霊塔の移設を要請されたのをきっかけに、倶楽部の理事会で「日本人墓地」のことが、たびたび議題に上るようになる。そして 1992(平成 4)年と 2000(平成 12)年に日本外務省の支援を仰ぎ、大規模な整備事業を実施。こうした経緯から、倶楽部が墓地管理委員会を組織して、慰霊祭を毎年挙行している。

この墓地には日本の桜が植えられている。伊豆を原産とする河津桜という品種で、春節の頃に満開となる。これは 2002(平成 14)年 8 月に香港で公演した歌舞伎俳優の市村萬次郎・潔子夫妻の尽力により、一般社団法人「霞会館」を通じて公益財団法人「日本花の会」から、倶楽部へと寄贈されたものだ。2004(平成 16)年 2 月 14 日、植樹式を挙行。横田淳・総領事夫妻をはじめ在留邦人の手で 14 本が植えられた。このうち 8 本が根付き、ピンク色の美しい花を咲かせている。

1919年火葬場に建てられた萬靈塔が左上方に建つ。
「森下仁丹」香港代理店を営んだ三浦清一の葬儀
(提供：高添強)



萬靈塔 S35/2/31
周囲に墓地番号を記した石材が散在する。この小さな瓦礫は、
墓石を建てられなかった人の墓標である

墓地に咲く河津桜 (倶楽部撮影)



(参考文献)

- 「大谷光瑞の研究—アジア広域における諸活動—」 2013年9月 柴田幹夫(著)
広島大学学術情報リポジトリ 乙第4211号
[https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/doctoral_thesis/%E5%8D%9A%E5%A3%AB\(%E5%AD%A6%E8%A1%93\)/p/16/item/35161](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/doctoral_thesis/%E5%8D%9A%E5%A3%AB(%E5%AD%A6%E8%A1%93)/p/16/item/35161)
- 「香港日本人学校の動向と香港本願寺」 2004年11月 小島勝(著)
『佛教文化研究紀要』第43号(42～61頁)

- 「辛亥革命以前梅屋莊吉在香港的活動(辛亥革命以前の梅屋庄吉の香港における活動)」吳偉明(著)「辛亥革命與亞洲」横浜會議<2011年11月5日～7日>報告論文 合田美穂(訳)
[静岡産業大学学術機関リポジトリ \(nii.ac.jp\)](http://www.nii.ac.jp)
- 『明治初期に於ける香港日本人』1937年1月 奥田乙治郎(著)
台湾総督府熱帯産業調査叢書<第5号>
- 『香港事情』1917年5月 外務省通商局(編)国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/956860> (コマ番号 189～194/198)
- 「香港の日本人墓地—船員の墓碑を中心として—」
1973年10月 運輸省鉄道監督局 赤岩昭滋(著)『海事史研究』21号(66～81頁)
- 『香港日本人社会の歴史—江戸から平成まで—』2006年3月 香港日本人倶楽部史料編集委員会
- 『一写真集—香港日本人墓地』2006年3月 香港日本人倶楽部墓地管理委員会

編集後記

*ハッピーバレーの墓地には、明治時代に蒸気船でやってきて、小さな港町だった香港で暮らした日本の方々が眠っていらっしゃいます。その足どりをたどっていくと、世界中に史料が眠っていました。そこから物語をつむいで、バイリンガルで世界に発信しようというのが、このサイトのねらいです。英語版は日本語からの翻訳ではなく、イギリス人のライターが書き起こしたため、内容が異なります。時空を超えて伝えるためには「どうしたらいいのかな」と、チーム全員で頭をひねりました。(中野)

*I feel privileged to have been given the opportunity to share the stories of these early Japanese travellers and residents in Hong Kong. Our research has uncovered very personal tales of both success and hardship, and has provided me with a new lens through which to view the city that I love and call home. (CHALLEN)

*2000年9月、初めての慰霊祭に新聞記者として参列。ここに眠る人たちのことをもっとよく知りたいと思いながら、記事を書きました。縁あって倶楽部に転職して墓地の整備に携わり、中野理事のご指導を仰いで、20年越しの思いをようやく遂げることができました。次世代に語り継ぎ、この墓地の存在を忘れないことが、何よりの御供養です。(杉村)

『香港セメタリーに眠る日本人の物語 明治開国から大正期にかけて(1878～1918)』

発行日 令和3(2021)年12月

発行者 香港日本人倶楽部 香港日本人墓地管理委員会(委員長・岩見武夫)

編集委員 海老原強 河合耕作 木戸貴文 杉村朋子 戸田潤 中野嘉子 水上俊一郎 柳生政一

協力 香港特別行政区政府・政府檔案處、生死登記總處、港島墳場及火葬場辦事處

香港聖公會檔案館、在香港日本国総領事館 ほか

監修 中野嘉子(香港大学)

写真撮影 久米美由紀

英文執筆 Georgina CHALLEN

和文執筆 杉村朋子(香港日本人倶楽部)